

科学研究費補助金の拡充と制度改革

平成23年度予算案2,633億円
平成22年度予算額2,000億円

資料3-2
科学技術・学術審議会
学術分科会(第42回)
H23.1.17

平成23年度予算案の概要

◆若手研究者の「チャレンジ」機会の拡大

○若手研究者向けの「若手研究(A・B)」を拡充。

特に、若手研究者支援の主要な研究費である「若手研究(B)」について、新規採択分について採択率30%(試算*)及び基金化を図る
・若手研究(B)→新規採択分として262億円(平成24年度以降の研究費相当分124億円を含む)を確保

○「挑戦的萌芽研究」について、新規採択分について採択率30%(試算*)及び基金化を図る

・挑戦的萌芽研究→新規採択分として135億円(平成24年度以降の研究費相当分57億円を含む)を確保、間接経費の措置

◆多様な学術研究を支える「基盤研究」の充実

○「基盤研究(A・C)」を拡充。特に「基盤研究(C)」について、新規採択分について採択率30%(試算*)及び基金化を図る

・基盤研究(C)→新規採択分として451億円(平成24年度以降の研究費相当分249億円を含む)を確保

◆新たな研究領域の開拓

○「新学術領域研究(研究領域提案型)」を拡充(年次進行、対前年度55億円増)

<(*)22年度採択状況を基に試算>

学術研究助成基金(仮称)
により研究費が使い易く!

抜本的な制度改革「基金化」の実現

◆新しい、柔軟な発想が期待されるとともに、研究規模が小さく多くの研究者が対象となっている「若手研究(B)」「挑戦的萌芽研究」「基盤研究(C)」を対象に、平成23年度から、新規採択分について複数年にわたる研究費の使用を可能とする「基金化」を図る

→予定外の進展があった研究について前倒しして実施することを含め、研究費の柔軟な執行が可能となる。

→複数年にわたって研究費の使用が可能となり、研究に専念できるとともに、ムダな「予算の使い切り」がなくなる。

新規採択の約8割が対象

現状イメージ

	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25
H19採択分	新規①	継続②	継続③	継続④			
H20採択分		新規①	継続②	継続③	継続④		
H21採択分			新規①	継続②	継続③	継続④	
H22採択分				新規①	継続②	継続③	継続④

基金化後イメージ

	H22	H23	H24	H25	H26	H27
H20採択分	継続③	継続④	← 継続分は従前と同様			
H21採択分	継続②	継続③	継続④			
H22採択分	新規①	継続②	継続③	継続④		
H23採択分		新規①	継続②	継続③	継続④	
H24採択分			新規①	継続②	継続③	継続④

基金分853億円

H23以降は一括予算措置

限られた予算のより効果的・効率的な活用

研究活動の活性化